

博士論文審査要旨

論文審査担当者

主査	明星大学教授	星	山	麻	木
副査	明星大学教授	島	田	博	祐
副査	明星大学准教授	石	田	健	太郎
副査	東洋大学教授	是	枝	喜	代治

申請者氏名 佐々木沙和子

論文題目 就学前のわが子の発達が気になる保護者が求める支援に関する
教育学的研究－ソーシャルワーク実践における生態学的時系列モデル
の生成について－

(論文審査の結果の内容)

本研究における博士論文としての社会的意義について、以下三点述べる。

第一に、本研究は、研究対象として、就学前のわが子の発達ที่気になる保護者に着目している。保護者支援の研究は「障害」の診断のついた子の保護者を対象とするものが多かった。しかし本研究では、研究対象を就学前のわが子の発達ที่気になる保護者としている。今まで言及されてこなかった「診断のない子ども」の保護者においても葛藤や支援ニーズがあることに着目し、社会的圧力の中で支援につながりにくい母親に支援のニーズがあるという点を明らかにしたのである。

これは第 1 章、研究の背景を先行研究より明らかにし、就学前のわが子の発達ที่気になる保護者支援の現状と課題として論じている。家庭・教育・福祉の連携を通じた障がいのある子どもと保護者が地域で切れ目のない支援が受けられるような体制作りが必要であるとしている。加えて、ソーシャルワークの視点で保護者支援を検討する必要があるのではないかと推測し、就学前のわが子の発達ที่気になる保護者支援に関する課題として、以下 4 点述べている。①保護者を調査対象とした研究、②保護者が抱えるソーシャルワークのニーズ調査、③保護者自身の環境や状況に着目した保護者支援の検討、④保護者と周囲との関係性をベースとした保護者支援の検討である。

第二に、第一研究より第五研究までの研究分析の手法の新規性である。質的研究の様々な研究手法から、従来の方法を応用し、保護者が子育ての中で、その時代の流れを追って整理している。

第1研究では、幼児の診断の有無を比較軸として、保護者一人一人の語りから得られた、求めている支援についてKJ法による分類・分析を行っており、診断のない幼児の保護者は「心理的サポート」や「相談」の支援内容を求めていることを明らかにしている。

第2研究では就学前のわが子の発達が気になる保護者の気持ちが揺れ動く場面や保護者のライフストーリーから保護者支援についての検討をしている。その中では親子の生活が変化する幼児の入園時や就学時に、特に保護者はわが子の発達について気になる場面が増えていた。加えて、保護者のライフストーリーを理解し相談を担うことができる存在が、保護者支援に重要であるとしている。

第3研究では、就学前の幼児の保護者が求めているソーシャルワークの15機能に関する30項目のアンケート調査を実施している。保護者がより安心して子育てを行うことができる保育や支援の環境を整えていくために、保護者一人一人の背景から、保護者と保育者が協働関係を構築しつつ支援を検討する必要性を明らかにしている。

第4研究では保護者3名と保育者1名の個別の聞き取り調査を実施し、保護者と幼児の担任であった保育者の具体的な実践やエピソードの振り返りに関する語りを、複線経路・等至性モデル (Trajectory Equifinality Modeling: TEM) を用いて分析した。その結果、保育者が行う協働の視点として、保護者自身の生活面や気持ちにも配慮しながら幼児の発達を共に支えていく内容が得られている。

第5研究として第4研究の調査対象であった保護者3名と保育者1名によるグループインタビューを実施し、個別の聞き取り (第4研究) で得た内容をもとに、後続調査を行い、わが子の姿に関する語り合いの中から、保護者と保育者が互いやわが子、さらに他児を認識していた記憶を共有している。

第三に、保護者が必要とするソーシャルワークを教育学的視点より明らかにすることを目的とし、特に周囲とのエコロジカル (生態学的) な関係性の視点で保護者支援を検討した点である。保護者と保育者が協働で幼児の発達を支えていく視点について、就学前のわが子の発達が気になる保護者支援の在り方として、理論モデルを構築した。

ジャーメインのエコロジカル視点のソーシャルワークと、谷口のエコロジカル・ソーシャルワークに加えて、Bronfenbrennerの環境下で変化していく生態学的移行の視点も視野に入れた切れ目のない継続的な支援と共に、保護者と保育者はAnderson, et alのコラボレイティブ (協働) な関係性を築いていくことと考え、生態学的時系列モデルとして提示した。これらを通じて、時系列で保護者のニーズの変化のデータを収集しており、ソーシャルワークという保護者に対する支援のネットワークづくりも一時点に留まらず、子どもの年齢という時系列と保護者の支援

ニーズの変化の流れを示している。

このように、保護者と保育者の協働関係を通じた保育を実践していく視点や、保育者に必要な視点として保護者の過去・現在・未来を見据えた時系列で目の前の保護者への関わり方を検討・実施していくことが挙げられた。加えて、保護者自身が発達や保育を学ぶ機会を設定することが必要であるとしている。

以上の三点より、支援を行う保育者と保護者の関係性の構築について検討し現代社会の保護者支援の課題と解決に寄与する意義ある研究として、研究課題から研究目的などの全体構成一連の流れが明確であること、総合考察で提示された生態学的モデルについても、その実証については今後の課題であるとされるものの本論5つの研究から得た知見に基づいて、生態学的時系列モデルの必要性を提示しており、独創性も充分であることが評価された。保護者の支援に対する教育的視点は重要な知見が多く含まれており、就学前のわが子の発達が気になる保護者が求める支援の意義を確信できる。

したがって、これらの内容を慎重に審査した結果、合格と判定した。

(試験および試問の結果の要旨)

試験および試問においては、以下の点について質疑があった。

① 論文題目における主題と副題の入れ替えを含む修正提案②今後の課題と展望についての加筆提案である。

質疑に関しては以下のように対応した。

タイトルを旧タイトル「生態学的時系列モデルから考える就学前のわが子の発達が気になる保護者が求める支援に関する教育的研究—保護者支援に必要なソーシャルワークに着目して—」より「就学前のわが子の発達が気になる保護者が求める支援に関する教育的研究—ソーシャルワーク実践における生態学的時系列モデルの生成について—」と修正した。②構築されたモデルよりどんな新しい知見が得られたか、保護者と保育者の協働関係から得られた知見に関し、より明確に示した方がよいという指摘により、総合考察の図表の追記と説明することで対応した。また保護者同士の支え合いとしてピアサポート、ペアレントメンター等の研究について追記、総合考察の図表の追記と説明を加えることで対応した。

以上、総合的に判断し、本研究は博士(教育学)の学位を授与するに十分価値あるものと認める。慎重に審査した結果、合格と判定した。